

活動先：社会福祉法人 愛光園 「知多地域障害者生活支援センター らいふ」

1、 活動先紹介と、私達の活動内容

<活動先紹介>

- ・平成9年4月に開設。
- ・自立支援法に基づき、移動支援事業、日中一時支援事業などを行っている。対象者は知多半島3市2町されている。

(大府市・知多市・東海市・東海町・阿久比町) ※日中一時支援事業：大府市は対象外。

- ・らいふ独自のレスパイトサービスによって家族を介護から一時的に開放して家族の代わりに介護をする。これは制度にあるサービスではないので自己負担になる。

<活動内容>

- ・自立課題を考え作成する。
- ・子どもたちと一緒にフルーチェを作る。
- ・個人の特性に合わせた支援をする。
- ・自立課題を見守り、できたら褒めてあげる。(達成感を味わうことで次に繋げていく。)
- ・子どもたちができることを増やしていくために、手伝うことも大事な支援だが、見守ることも支援の一つと考える。
- ・自分たちの価値観にとらわれずに、子どもたちのペースに合わせて支援することを第一とする。

2、活動目的、目標

目標：「子どもたちと一緒に遊びながら障害を考えるとともに自立を促す。」

- ・らいふが地域で何を必要とされるかその意義について学ぶ。
- ・障害児だけでなく、周りの環境にも目を向けてみる。
- ・個人の特性に合わせたコミュニケーションの仕方を学ぶ。
- ・自分たちも楽しんで活動に取り組む。
- ・子どもたちのペースに合わせて支援する。

3、活動を通して理解したこと、気づき

「らいふ」の活動を通して、「らいふ」が利用者や家族にとってなくてはならないものだと感じた。親は普段子どもの世話に追われて、自分の時間がなく、心身ともに疲れがちになってしまうが、「らいふ」があることによって、休息する時間や自分のために使う時間を確保でき、生活に余裕を持つことができると思った。また、子どもにとっても、学校以外

での居場所ができ、「らいふ」で自立課題などを行うことによって、社会へ出ていく準備ができたり、たくさんの人とのかかわりができたりと存在は大きいと思った。さらに、障害があることで差別や偏見をされ、人や地域と繋がる機会を奪われてしまうことがある。しかし、「らいふ」の存在が地域と障害児や親とをつなぐ場所となっている。「らいふ」がコミュニケーションの場の一つとなり、社会に出ていくためのサポート機能を果たしていると感じた。

子どもたちと接していく中で、子どもたちのペースを大切にす、傍で見守る、物事ははっきり伝える、会話の方法は喋るだけではないことを学んだ。一人ひとり障害の程度が異なり、特性も違うので、個人に合わせたペースで接することが必要である。支援者が強制的にさせるのではなく、促して子どものペースで動いてもらうことが大事だと学んだ。また、本人ができないことを全てやってあげるのではなく、少しでも自分自身で取り組めるような環境を作り、支援者は傍で見守ることも大切な支援だと感じた。自分ひとりだけできたという感情を持ってもらうことが大事で、何でもしてもらえる環境ではなく、自分で初めから最後までやってみて“できた”という達成感を感じる事が子どもの成長には大事だと接していて感じた。障害児に物事を伝えるときは「やっちゃダメ」ではなく、「走っちゃダメ」な時も何がダメなのか具体的に伝えたり、人によっては「走っちゃダメ」の否定語を使うのではなく、「歩きます」などの肯定的表現を使って示すなど、はっきりと簡素に理解しやすいように伝えることが必要である。会話の方法では、PECS（ピクチャーエクスチェンジコミュニケーションシステム）という絵カードを使って、言葉のにくい子どもたちとコミュニケーションを取る方法がある、これを使うことによって、意思の疎通ができなくてイライラしてしまう子どものストレスも軽減し、自分の伝えたいことを相手に伝えることができる。言葉だけがコミュニケーションの方法ではなく、PECSやノンバーバル言語を使った方法もあることに改めて気付かされた。

4、活動先の抱える現状、問題点

ライフの抱えている現状は、人員不足、職員の低賃金、制度と利用者のニーズの差があげられる。どこの施設でも言えることだが、福祉職は給与が安いために、働き盛りの若者が集まらず、過密労働や利用者への質の良いサービス提供の不十分さ、利用者のニーズへ十分に答えることができないという問題が起こっている。また、質の良いサービス提供をしようとしても、制度外で行うことになるので、利用料が高くなり、結局利用者へ重い負担となってしまう、ニーズに応えることができない状態である。

5、活動先への提案

親同士が交流する機会を作ったり、1つのことに全員で取り組んでみたり（今回私たちが実施したフルーチェ作りというような）、親子参加の遠足などの行事を実施してみるなどをすれば、より活動の幅が広がっていくと思う。このようなことを行うことで、親子のつな

がりが深まったり、親自身の負担軽減にもつながると考える。親同士の交流があれば、自分ひとりが抱え込んでるのではなく、他の人も同じ気持ちの人がいるのだという共感する仲間を作ることができ、ストレス等も少しは減っていくと思う。また、ひとつのことをみんなで作り上げることは、達成感を味わうことができ、子ども自身の新しい発見に繋がっていくと思うので、この 3 点を提案したいと考えた。

6、地域活動から学んだ地域福祉、私たちの思い、考え

4 月から 7 月の活動前の学習では、NPO の存在意義や活動先の理念、目的、自閉症についてなどを学び、NPO は地域住民から必要とされてできたこと、NPO があるからそれに関わる人々は生き生き生活できること等を理解した。活動先へ事前訪問することで、利用者さんに会うことはできなかったが、実際の活動現場へいき、スタッフさんから話を聞くことで、利用者さんとの関わり方や地域にとって「らいふ」とは何かを学びたいという意欲になった。

8 月、実際に活動してみて、最初は利用者さんとどうかかわっていいかわからず、おどおどして、自分たちに何ができるのか考えたが、日に日に関わり方もわかり、個人に合わせた支援、コミュニケーションをしたらいいことに気がついた。なかなかできないからといって、いちいち手を差し伸べるのではなく、声かけなどなるべく自分でできるように促すことが子どもの自立に繋がることがわかった。わからないことがあれば、すぐにスタッフさんに聞き、どう対応するのがいいのかを教えてもらい、すぐではなくても実践できるように努力することが大事だと思った。子どものペースに合わせすぎて、何でも要求を受け入れるのではなく、その時の状況に合わせて一人ひとりの自立につながる対応をすることが大事だと学んだ。

今までの活動、学びを通して、NPO はしっかりと地域に根付き、日常生活が当たり前になる人らしく暮らすためになくしてはならないものだと思った。家で独りぼちな高齢者のためのサロン、障害児が交流するための施設、子どもたちが学校帰りに遊んで帰る学童など、それぞれニーズがあるから地域に存在し、NPO の存在が地域活性化にも繋がっていると感じた。地域を作るのは一人の力では決して行い事はできず、地域住民の力が合わさって成り立っていくものだ。まだまだメジャーではない NPO の活動をもっと地域で取り上げ、地域住民一人一人が地域活動へ参加する形ができていけば、より地域が活発になると思った。

7、グループ研究の成果を踏まえて、今後の学びに向けて…

自閉症の子どもたちと一対一で関わることで、同じ自閉症でも、人によって特性が違う

ことが理解できたので、もっと自閉症児だけでなく、障害を持った大人の人など、多くの人とコミュニケーションをとり、障害について学んでいきたい。コミュニケーションの方法は決して1つではなく、コミュニケーションをする対象によっても変わってくるので、多くの人と関わり、コミュニケーション技術の向上をしていきたいと思っている。また、NPO を利用する人だけが対象ではなく、それを支える家族や、スタッフ、地域など周りの環境にも目を向けてみて、利用者の気持ちをくみ取ると同時に周りの思いや希望もくみ取っていかなければ活動は成り立っていかないと感じた。実際の現場で自分たちが経験したことを振り返り、学んだことを自分自身で整理し、さらに、そこから見えてきた課題を学び、研究していき、次の現場で活かすということがこのサービスラーニングを通して最も感じたことである。